

# チベットにおけるアビダルマ仏教の特色

池田 練太郎

ティソン・デツェン Khri strong Ide btsan 王(七四

二―七九七年)が、仏教をチベットの国教にすることを決意したのは西暦七六一年のことである。<sup>(1)</sup> それまでに仏教は、インドにおいて、少なくとも千百年以上の間、さまざまな形で発展継承されてきたことになる。したがって、そのようなインド仏教と、八世紀以降に導入され展開してきたチベット仏教の特徴を、一概に比較することなど簡単にできることではないが、しかしいまここで、あえてそのような観点からチベットのアビダルマ仏教を

概観してみようと思う。チベットにおけるアビダルマ仏教の特質は、インドのアビダルマ仏教との比較を通して初めて闡明することができるというからである。

インドにおけるアビダルマ仏教の基本的な姿は、釈尊が生存中に説いた教えの意味を、以後の仏弟子たちが解釈し研究したということの中にすでに認められる。それが種々の問題についていろいろな角度から行なわれたために、周知のように、仏教教団は多くの部派に分裂し、きわめて煩瑣な様相を呈するに至った。したがって、一口にアビダルマ仏教といってもその範囲は、問題の内容だけからみても、存在論、認識論、宇宙論、因果論、煩

悩論、修道論などなど、実に多岐にわたるのである。以下の論述では、このように多くの部派に分かれ、しかも種々の様相を呈していたインドのアビダルマ仏教が、チベットではどのような形をとっていったのかという点について考えてみたい。

## 二

最初に、現在のチベット大蔵経に収められている典籍から、チベットにもたらされたアビダルマ論書の種類を検討してみることにしよう。その「アビダルマ部」*Angon pa* に列挙される論書によつて、チベット人が認めたアビダルマ仏教の範囲が知られるはずである。そして、そのような視点からみると、「アビダルマ部」の中に収められる典籍全十八点<sup>(2)</sup>のうち八点が「俱舍論」*Abhidharmakośa* 関係の論書で占められていることがわかる。これは、チベット大蔵経所収の全アビダルマ典籍に対する比率としてはかなり高いものと言うことができよう。すなわち、チベットにおいてアビダルマ仏教といった場合、その中心をなすのが『俱舍論』であるとい

うことが、こうして単に典籍の数の上からだけでもわかるのである。<sup>(3)</sup>

「アビダルマ部」には、『俱舍論』関係の論書の他に、『世間施設』*Loka-prajñapti*、『因施設』*Karana-p.*、『業施設』*Karma-p.*の三論や、『入阿毘達磨論』*Prakarana-abhidharmavaatara*及びその註釈書*Sarasamuccaya*という説一切有部*Sarvastivadin*の論書が含まれる。このまでは、インド仏教の立場からもアビダルマの論書とすることに特に問題はなはずである。

次に、それ以外の典籍には、『優陀那品』*Udana-varga*とその『註解』*Vivarana*、そして、『聖法界心髓註釈』*Aryadharmadhātugarbha-vivaraṇa*、それに、『頌集論』*Gāthasamgrahaśāstra*と『頌集義と名づけられる論』*Gāthasamgrahaśāstra artha*の五篇がある。

このうち、最初の『優陀那品』は、南方上座部*Theravada*の『法句経』*Dhammapada*の説一切有部版のような趣きをもつものであり、論蔵より経蔵に入れられる方がふさわしいと思われる典籍である。事実、これと同じ文献が経典の部*bka' gyur*の「諸経部」*mdo sna*

tshegs の中にも収められている。これが「アビダルマ」に入れられたのは、その編者が有部の論師として有名な法救(Dharmatrāta, Chos skyob に帰せられるため<sup>(6)</sup>)はなからうか。また、この典籍の『註解』が「アビダルマ部」に収められたのは、もとになる『優陀那品』がそこに含まれているからという、ただそれだけの理由によるものと思われる。本来ならば、「諸経疏部」ndo tshogs 'bral pa に入れられるのが自然であらう。

次の『聖法界心髓註釈』は龍樹(Nāgārjuna, Klu sgrub の作とされる)きわめて短い著作であるが、内容的には諸法を七種に分類して説明するなど、確かに分析的傾向が強い。もしこれが、真に竜樹の作であるならば興味深いことではあるが、それについては将来の研究に俟たねばならない。同様のことは最後の二篇についても言い得るであろう。それらはいずれも世親の著作とされ、後者は前者の註解である。これらについても今後研究がなされねばならないが、必ずしもアビダルマ論書の中に含まなければならぬような内容ではないように思われる。いずれにしてもこれら三書は、従来あまり注目されなかつ

た論書であるが、サンスクリット原典も漢訳も存在しないので、その意味でチベット訳の存在意義は大きいといえるであらう。

ところで、八二四年に成立したチベットにおける最初の仏書目録である『チンカルマ目録』*lDan(lHtan)dkar ma* (『チンカルマ』と略す)、及び一三二二年にプトゥン Bu ston Rin chen 'grub (一二九〇—一三六四年)により著わされた『プトゥン仏教史』*bDe bar gshes pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'dyung gnas gsung rab rin po che'i mdzod ces bya ba* (『チンカルマ目録』と略す)においては、上記の諸論書はどのような形で扱われているのだろうか。いうまでもなく、前者は、チベットに本格的に仏教が導入されてから間もない時期に成立したという意味で重要であるし、後者は、後にチベット大蔵経が編纂されるための基礎を示したという意味で重要な目録である。これらの目録の中には、「アビダルマ部」*ngon pa* と呼ばれる部類はなく、『チンカルマ』では「小乗の論書」(theq pa chung ngu'i bstan bcos) の項に、また『プトゥン目録』でも「初期の仏説である」四諦法輪に

関する注釈'(bden pa bzhi'i chos kyi 'khor lo'i dgongs 'gred) の中の「小乗の論書」(theq chung gi bstan bcos) の項に、いわゆるアビダルマ論書と見做すことのできるほとんどの典籍が収められている。そしてこのことよって、初期のチベット仏教では、インドのいわゆるアビダルマ論書が、「アビダルマ」*chos ngon pa* の論書としてではなく、「小乗」*theq pa chung ngu* の論書としてとらえられていたことが知られるのである。

ここでは「目録」について検討するのが目的ではないので、結論のみを示すことにするが、チベット大蔵経の「アビダルマ部」に含まれている典籍のうち、『優陀那品』など三点(P. ed., Nos. 5597, 5598, 5600)を除いてすべてが『プトゥン目録』の「小乗の論書」の項に挙げられている。また、『チンカルマ』全体には大蔵経「アビダルマ部」の六割程度が含まれているが、特に「小乗の論書」の項目には全部で九点が列挙され、それらのうち六<sup>(9)</sup>点が『俱舍論頌』及びその註釈書関係の論書、残り三<sup>(10)</sup>点が『入阿毘達磨論』とその註釈書二点である。その中には、現在の大蔵経の中にもみられない『俱舍論』の釈書

二点(Lalou, Nos. 690, 691)が含まれている。そしてその他の典籍は「小乗の論書」の項以外の箇所にも収められているのである。

以上のことからみて、チベットに仏教が伝えられた当初、「小乗の論書」と見做されたのは『俱舍論』、『入阿毘達磨論』という有部の説を述べた二論書とその註釈書であったことが判る。しかも、その中でも特に『俱舍論』関係の諸論書が圧倒的に大きなウェイトを占めることは、先に述べたことから理解されるであろう。このような傾向は、プトゥンによる仏教書の整理を経て成立した現在の大蔵経を有するチベット仏教においても大きく変わらずに続いたわけである。したがって、チベットに伝えられたアビダルマ論書は、インドにおいて成立した多種多様な諸の論書と比較したとき、きわめて限定された範囲のものであると言わざるを得ない。それは、説一切有部系の、しかも『俱舍論』及びその関連の論書に限られると言っても大過ないのである。

さて、前述のように、チベットにおけるアビダルマ仏教の学習・研究は、『俱舍論』を手掛りとして行なわれたのであるが、そうして得られたアビダルマについての理解を、最も明瞭な形でまとめた著述として、一帯の「宗義」*grub mtha'* 文献を挙げなければならぬ。チベットにおける「宗義」文献については、近年日本の学界で次々に優れた研究成果が発表されているが、いまこゝでその概要を簡略にまとめておくことにしたい。

八世紀後半以降、インドの仏教はきわめて短い期間に、雑然とした形でチベットにもたらされたと考えられる。したがって、チベットの仏教者にとっては、それらの諸学説に、一定の価値観に基づいて、整然とした秩序を与えることが必要であった。すなわち、仏教の正しい立場を確立し布教するためには、中国流に言えば、一刻も早く「教相判釈」を行なう必要があったし、また、そうして「教判」を行なうこと自体が仏教を正しく研究することだったのである。ブッダの死後展開したインドのアビダルマとはまったく事情の異なるチベットの仏教にとっては、このような作業自体が、ある意味でアビダルマ的

な要素をもっていると言えるが、そのことについては後述することにした。いずれにしても、このようにして、説一切有部 *Sarvastivādin*→捺曇部 *Sautrāntika*→唯識派 *Vijñānavāda*→中觀派 *Mādhyamika* という順に仏教の各説をとらえるという、「宗義」文献に共通してみられる配列が結論として得られたわけである。<sup>(12)</sup> この場合、後置される方がより高い境地の学説と認められたと考えてよいであろう。そして、このような体裁の「宗義」文献の先駆をなすと見做されるのが、九世紀初頭に成立したと考えられる、イェンチー *Ye shes sde* の『見差別』*lta bai bhyad par* であり、この著作によって、仏教導入後わずかの間にチベットの仏教学が非常に高い水準にまで至ったことが理解されるのである。<sup>(13)</sup>

その後、チベットの仏教界では幾つもの「宗義書」が著わされたが、現在利用できる主なものを以下に挙げておこう。

- (a) サキヤ・パンディタ *Sa skya pandita* (一一八二—一二二五年) : *gZhung lugs legs par bshad pa*<sup>(14)</sup>

- (b) ウンロサル *dBus pa blo gsal* (十四世紀前半) : *Grub pai mtha' rnam par bshad pai mdzad*<sup>(15)</sup>

- (c) チューキキ *Chos kyi rgyal mtshan* (一四六九—一五四六年) : *Grub mtha'i rnam bz-hag*<sup>(16)</sup>

- (d) シヤムヤン *Sham-nyen* (生没不詳) : *Jam dbyangs bzhad pa* (一六四八—一七二二年) : *Grub mtha'i rnam bshad*<sup>(17)</sup>

- (e) チャンキヤ・ロソ *Chang skya Rol pa'i rdo rje* (一七一七—一七八六年) : *Grub pai mtha'i rnam par bzhag pa*<sup>(18)</sup>
- (f) クンチョー *Kon mchog 'jigs med dbang po* (一七二八—一七九一年) : *Grub mtha'i rin chen phreng ba*<sup>(19)</sup>

チベットにおけるアビダルマ仏教の特色

アビダルマに関する学説は、これらの「宗義」文献中の「毘婆沙師」*Bye brag smra ba*, *Vaiśaṣika* の章において扱われており、この場合「毘婆沙師」というのは、部派分裂によって生じたすべての部派を含むと同時に

に、狭くは説一切有部のみを指し、しかもその学説の内容解説は、ほとんどすべて『俱舍論』及びそれ以後の論書に基づいているとみることも可能である。<sup>(20)</sup>

とりわけ、十八世紀のゲルク派 (*dge lugs pa*) の僧 *ドゥンロ* (十八世紀) *Klong rol bla ma* (一七一九—一七九四年) の著作集の中に、アビダルマ仏教に関する興味深い一文獻が収められている。それは、『内明』アビダルマ *kyi don bsdu bai ming gi grangs bzhugs so* (『義撰名数』と略す)<sup>(21)</sup> という著作である。この書の主題は、『俱舍論』の章立てに従ってその記述内容を要約し概説するところである。「アビダルマ蔵」という書名を付しながら、その内容が『俱舍論』であること自体は、前述してきたようなチベットにおける「アビダルマ仏教」の特色がよく顯われているといえるのである。それに加えて、本書のもつもう一つの大きな特色は、そのような『俱舍論』概説という本題に入るに先立って、序説という形で「宗義書」が附せられていることである。

因みに、この部分 (*pa 1a2—4b4*) は、

- I 外教の宗義 *phyi rol pa'i grub mtha'*  
 a, 断滅論 *chad par smra ba (ucchedavāda)* 一種  
 b, 常住論 *riag par smra ba (śāśvatavāda)* 十  
 一種

II 仏教の宗義 *nang gi grub mtha'*

- a, 毘婆沙師 *Bye brag smra ba (Vaibhāsika)*  
 b, 経量部 *mDo sde pa (Sautāntika)*  
 c, 唯識派 *Sens tsam pa (\*Viñānavāda)*  
 d, 中觀派 *dBu ma pa (Madhyamika)*

- (1) 自立派 *Rang rgyud pa (\*Svatantrika)*  
 (2) 帰謬派 *Thal 'gyur ba (\*Prāsaṅgika)*

というように、まさに独立した「宗義書」として、完全な形を具えているのである。そして、ロンドルラマは、こうした「宗義書」を「アビダルマ蔵」に関する著作に付け加えた理由を、「アビダルマ Chos mngon pa は、外〔即ち、仏教以外の諸学説〕と内〔即ち、仏教の諸学説〕の宗義を知る必要があるの……」(Pa 12)と述べているのである。すなわち、この短いことばの中に、あらゆる学説を分析し、まとめ、理解する姿勢が「アビダ

ルマ」には不可欠の要件であり、そのような意味で「宗義書」も活用されなければならない<sup>(22)</sup>、という彼の考えが表現されていると言えるのである。教理に対する分析・研究ということがインド以来のアビダルマ仏教の目的であることを想えば、このようなロンドルラマの考えも妥当なものと思ふし得るし、また、チベットにおける「宗義」文献の著者たちや、それを利用した学僧たちにも、「宗義書」に対するこうした考えは、多かれ少なかれあったのではないかと想像されるのである。すなわち、「宗義書」中の「毘婆沙師」の章に限らず、「宗義書」を作成する姿勢そのものが、チベットのアビダルマ仏教の一面を語っているとも言えるわけである。

四

さて、以下に上掲のロンドルラマの『義授名教』にみられるいくつかの点を手掛りにして、チベットにおけるアビダルマ仏教の諸説を概観することにした。ロンドルラマは、チベット仏教がすでに往時の活力を失いつつあった十八世紀の人であり、また学問的にも、ほぼ同世

代のチャンキヤのような明晰な洞察力をもっていたようには見受けられない。それ故、その著作の中に彼独自の新しい教義解釈などはあまり期待できない。しかし、彼の著述は、それまでのチベット仏教の研究成果を手際よくまとめたとはいふ点で出色であり、その記述によって、チベットのアビダルマ仏教の一つの帰結を知ることができるのである。

(a) 部派分裂に関しては、チベット一般の伝承と同じく十八部派の名を挙げており、また、根本の部派を、説一切有部 *Thams cad yod par smra ba (Sarvāstivādin)*<sup>(23)</sup>、大衆部 *Phal chen pa (Mahāsaṅghika)*<sup>(24)</sup>、上座部 *gNas brian pa (Śhāvira)*<sup>(25)</sup>、正量部 *Kun gyis bkur ba (Sammitiya)* の四部と主要部派を述べている。そして、それぞれの部派の使用した言葉が、有部→*Sam skritā (Sanskrit)*、大衆→*Pra kri ta (Prākṛit)*、上座→*Pi sha tsi* (→*Piśāca-bhāṣā*)、正量→*A wa bhran sha (Abrahmaṣa)* と述べている。このように伝承が、インドからのものか、あるいはチベットで起ったのかよくわからないが、これらの言語の使用された時代・地域などが

ら、それぞれの部派の活躍した時代・地域などを限定することができるといふ点で、この記述は興味深いものといえる。ただし、部派分裂についてのチベットの伝承は、実際に部派が勢力を有していた時代からかなり隔たった時代のものであることには注意する必要がある。

(b) 「宗義書」的な体裁をもつ箇所には、(a)に述べたような部派分裂の問題の他に、有部に関するいくつかの記述が列挙されている。それは、

1. 毘婆沙師には、カシユミール〔有部〕*(Kha che pa, Kāśmīra)* と西方師 *(Nyī 'og pa, Pāścātya)* の二派がある<sup>(26)</sup>。
2. 勝義諦 *(don dam bden pa, paramārthasatya)* と世俗諦 *(kun rdzob bden pa, saṃvṛtīsatya)* と<sup>(27)</sup>
3. 三世実行説 *(dus gsum rdzas su grub pa)* と<sup>(28)</sup>
4. 感官知 *(dhang shes)* と家象 *(gyu)* と<sup>(29)</sup>
5. ブツダの色身と無余涅槃<sup>(30)</sup>

などである。これらのうちで、本書に限らず、他の「宗義書」でも特に重要なテーマとして扱われるのは、(2)

の「二諦説」と(4)の「認識論」の問題である<sup>(25)</sup>。この両者は、チベット仏教におけるきわめて大きなテーマであり、毘婆沙師の章以外の経量部・唯識派・中観派の章においても詳細に論じられているのであるが、この二つは問題として指摘するほど定めることにする。いずれにしても、この二つの問題は、『俱舍論』及びそれ以前のアビダルマ仏教においては中心的なテーマとなることはなかった<sup>(26)</sup>。チベットでこの問題が重視されるようになったのは、『俱舍論』以後インディにおいて発達した中観・唯識仏教や論理学・認識論の影響を受けたためと考えられる。

(c) アビダルマの典籍としては次の七論書を挙げ、それを「アビダルマの七部」*nggon pa sde bdun* としている。この呼称は、チベットにおいては定型句として用いられるものである。

- 1' *Ka tyai bu* (Katyayanputra, 迦多衍尼子):  
*Ye shes la yug* (*Jñānaprasthāna*, 発智論)
- 2' *dByig bshes* (Vasumitra 世友): *Rab tu byed pa* (*Prakarana* 品類足論)

部」の他に *Bye brag bshad mdzod chen po* という論書を挙げるが<sup>(27)</sup>、これは恐らく『大毘婆沙論』*Mahāvibhāṣā* のことであろう。なお、これらの諸論書は、名称だけは列挙されるが、それらによって論旨にかかわる主張が提示されるようなことは、チベット仏教においてはみずないといつてよいのである。

(d) 次に、『俱舍論』に対する註釈書については、最初にインド人の著者の名前を列挙し、次いでチベット人の著者名を挙げてゐる。インド人の名前は、称友 *Yasomitra*、滿増 *Pūrṇavaradhana*、陳那 *Dignāga*、安慧 *Sthiramati*、衆賢 *Saṃghabhadra*、それだ *Samathadeva* であり、これらの人々の著作はいずれもチベット大蔵経に収められている。

- チベット人で註釈書を著わした人の名前は、
- 1、チム一切智者の弟子で、ナルタン〔寺〕の人であるチム・ジヤムヤン *'Chim thams cad mkhyen pa'i slob ma snar thang ba mChim 'Jam dbyangs*
  - 2、*ンンチホン・ダヤンヤン* *Paṅ chen dGe 'dun grub* (Dalai-lama I, 一三七一—一四七四年)<sup>(28)</sup>

- 3' *IHa skyid* (Devasarman 提婆設摩): *rNam shes tslogs* (*Vijñānakāya* 識身足論)
- 4' *Sha rti bu* (Śariputra 舍利子): *Chos kyī phung po* (*Dharmaskandha* 法蘊足論)
- 5' *Mo'u gal bu* (Maudgalyāna 大目犍連): *gDags pa'i bstan chos* (*Pratītipakāśtra* 施設論)
- 6' *gSus po che* (Mahākauṣṭhīla 大俱絺羅): *'Gro bati rnam grangs* (*Sanṅitiṭṭarjāya* 集異門足論)
- 7' *Gang po* (Pūrṇa 富樓那): *Khams kyī tslogs* (*Dhātukāya* 界身足論)

これらの論書は、*らうちびをなへ*、*らわぬ*、「六足・発智」といわれる有部の主要論書である。しかし、この小論の最初を示したように、これらの七論のうち、チベットにおいて訳出された論書は、『施設論』のみであり、その他は上記のような形で名称と著者のみが伝承されたのである。このような論書の列挙の仕方は、最後の(6)と(7)とを入れ替えただけの形で、称友 *Yasomitra* の『俱舍註疏』*Abhidharmakośa-vyākhyā* (Woghara ed., p. 11) にみられる。『義撰名数』には、「アビダルマの七

- 3' *ヤンチホントホヤン* *Drung chen dngos grub*
- 4' *ンンチホン・ノードク* *Paṅ chen bSod* (nams) *grags* (pa) (一四七八—一五五四年)
- 5' *チイチェン・クンチョーチニーヘル* *Khri chen dKon mchog chos 'phel* (一五七三—一六四六年)
- 6' *キェルワ・ガヤン* *rGyal ba Inga pa* (Dalai-lama V, 一六一七—一六八二年)<sup>(29)</sup>

7、ジヤムヤンシェーヤ *'Jam dbyangs bzhad pa* など、となっている。これだけを見ても、チベットにおいていかに『俱舍論』がよく読まれた論書であるかがわかるのであるが、この点に注意を要するのは、これは、当時最も大きな勢力を誇っていたゲルク派 *dGe lugs pa* に属する人か、それに近い関係の人に限られているところである。ゲルク派に対立するサキヤ派 *Sa skya pa* の人物の著作などは、このうちに含まれていない。サキヤ派の中でも『俱舍論』に対する註釈書や、その類書は著わされたのである。コライヤン・ソナムヤンゲ *Go ram pa bSod nams seng ge* (一四二九—一四八九年) の *Chos mngon pa mdzod kyī bshad thabs kyī man*

ngag ngo mshar gsun ldan<sup>(32)</sup> や、シャーキヤチョク  
チン Shalkya mchog Idam (一四二八—一五〇七)の *Chos  
mngon pai mdzod 'kyi dka'i bai gnas rnam par  
bshad pai bstan bcos bye brag tu bshad pai msho  
chen po*<sup>(33)</sup> などがその例である。このような宗派の違いに  
よって、『俱舍論』の註釈内容に相違がみられるか否か  
については将来の研究が望まれる。

(e) 日本の伝統的な「俱舍学」では、『俱舍論』に  
説かれる諸法を「五位七十五法」という定型句によつて  
まとめるが、チベットにも、「五位」に相当する「五つ  
の基礎 (gsni lnga)」という定型的な言い方がある。こ  
の「五位」という語は、『俱舍論』はもとより、インド  
撰述の註釈書などの中にも、その相当語が見出されず、  
中国において慈恩大師(六三二—六八二年)の『大乘百法  
明門論解』巻上に現われるのが最初であると思われる。<sup>(34)</sup>  
チベットにおける *gsni lnga* の語がインドの原語からの  
翻訳語なのか、中国仏教からの影響によるものなのか、  
あるいはチベットで独自に考え出されたものなのか、興  
味深い問題であるが、現在までのところ明確に判じ難

い。

また、中国・日本では、『俱舍論』所出の諸法を「七  
十五法」と数えるが、それは「心」*citta* の位を一つと  
みているからである。これに対し、チベットでは「心」  
を「眼・耳・鼻・舌・身・意」の六識として一々数える  
ので、法の数が中国・日本の場合より五つ多くなる。し  
たがって、チベットにおいては、諸法の数は合計「八十  
法」となるのである。<sup>(35)</sup>

その他にも『俱舍論』の構造を「四諦」によって分析  
する説など、種々の興味深い説が示されているが、最後  
に、『義撰名数』にみられる記述の中で注意するべき説を  
一つ挙げておく。それは、『阿毘達磨集論』*Abhidharma-  
samuccaya* を「上のアビダルマ (mngon pa gong ma)  
『俱舍論』を「下のアビダルマ (mngon pa 'og ma)」と  
する説である。このような両論の位置付けはチベットに  
おいては普通に受け入れられていたようであるが、<sup>(36)</sup> この  
ようなとらえ方は恐らく、「宗義書」に見られる有部と  
唯識に対する評価と深く関係しているであろう。

## 五

以上述べてきたことから、チベットのアビダルマ仏教  
は、インドにおける広範、多様なアビダルマ仏教に比べ  
た場合、きわめて限られた範囲のものであると言わざる  
を得ない。そのような限定を与えた大きな要因は、チベ  
ットが仏教を本格的に導入し始めた八世紀当時の、イン  
ドにおけるアビダルマ仏教の衰退と、また同時に中観・  
論理学・認識論の発達にあったといえよう。それより約

百年前に唐の玄奘三蔵(六〇〇—六六四年)は、『俱舍論』  
のみならず、いわゆる「六足・発智」や『大毘婆沙論』  
までも漢訳しているのである。百年後のインドに、それ  
らの写本がまったく残存していなかったとは考えられな  
いから、チベット人は、ある一定の問題意識に基づいて  
取捨選択を行ない、それらのアビダルマ典籍については  
名前だけを伝えるにとどめ、訳出することはしなかった  
のであろう。

しかし、チベットのアビダルマ仏教は範囲は限られて  
いるにしても、先に見た二、三の点からも知られるよう

に、インドのアビダルマを研究する上に有益な、多くの  
示唆を与えてくれるのである。

また、前述したように、それはインド仏教研究の一つ  
の資料となるだけではない。たとえば、サキヤ派とゲル  
ク派のアビダルマ説の違いを研究することなど、純粹に  
チベット仏教研究の領域においても、この分野は見直さ  
れる必要があるのである。

なお、紙幅の都合で触れなかったが、「アビダルマ」  
の概念が諸法の解釈・研究ということを含むものであれ  
ば、例えば、イェンエーデ *Ye shes sde* 等によって編  
纂された『翻訳名義大集』*Bye brag tu rtags par  
byed pa chen po* (*Mañjuśrī* 一四四年成立) や、『俱  
舍論』を初め多くのアビダルマ論書を訳したヘルツェク  
*dPal brsegs* (九世紀前半に活躍) の『法門』*Chos kyi  
rnam grangs* (P. ed., No. 5850) 及びその『備忘録』(P  
ed., No. 5849) *brJed byang* なども、まさにその意味  
で、チベットにおけるアビダルマの一つの成果と見做す  
ことができるということ、最後に指摘しておきたい。

註

- (1) 山口瑞鳳「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』第三号、昭和五十三年、二頁。以下、本論文中のチベット仏教史上の主要年代は、すべて山口博士の説に依った。
- (2) 北京版(以下 P ed.) Nos. 5587~5604. 本論文では、参照の便宜上、『影印北京版西藏大蔵経・総目録』に依り示すものとする。
- (3) P ed., Nos. 5590~5597.
- (4) 『雜部』(ngo tshar) は、安藤 Shiramati の註解(P ed., No. 5875) が収められている。
- (5) いわゆる「六足・発智」といわれる説一切有部系の論書では、この『施設論』のみがチベット大蔵経に収められている。また漢訳では、三種の『施設論』のうち『因施設』だけが訳出されている。
- (6) このことは、チベット訳自体の colophon にみられる他、世親 Vasubandhu も『俱舍論』の中で、法救によるブウダーナが編纂されたことを述べている (Pradhan ed., p. 3)。
- (7) 西岡祖秀『ブトワン仏教史』目録部索引、『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』第四号、昭和五十六年、六一頁、六三頁(注1)。なお、「小乗の論書」としては、同氏『ブトワン仏教史』目録部索引II『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』第五号、昭和

五十七年の当該箇所を参照。

- (8) 羽田野伯猷「チベット大蔵経縁起〔その一〕——ナルタン大学問寺の先駆的事業をめぐって——」『鈴木学術財団研究年報』3、一九六六年、五八—六二頁参照。
- (9) M. Lalou: Contribution à la Bibliographie du Kaniur et du Tanjur, Les Textes Bouddhiques au Temps du Roi Khri-sroñ-ide-bean, Nos. 686, 687, 689, 688, 690, 691.
- (10) Lalou, Nos. 692, 693, 694.
- (11) 本論文ではそれのローマ字を挙げることはしないが、松本史朗氏の「チベットの仏教学について」(『東洋学術研究』第二十卷第一号、昭和五十六年、一四八—一四九頁、及び註記)の記述を参照されたい。なお、この小論を執筆するにあたり、同氏の論文より多くの御教示を受けたことに記しておきたい。
- (12) 因だ、インゴの大哲学者、シヤンカラ Śānkara 七〇〇—七五〇年頃)の『ナンパ・ストラ註解』*Brahmavivahāra* (II, 2, 18) は「説一切有部 (Sarvaśtīva-vādin) 唯識派 (Vijñānāśītvamātra-vādin) 空観派 (Śarva-sūnyavāda-vādin) の三者がこの順序でみられるが、「宗義書」の四部派の配列に何らかの影響を与えた可能性はあると思われる。また、有部は「有外境論者」*bāhyārthavāda* とされるが、このように有部の立場をとるべき仕方はチベットにおいても同様である。な

- 持、シヤンカラの『Sarvāstīva-vādin』の中で、毘婆沙師と経量部の両者が含まれると解せられる。(金倉圓照『吠檀多哲学の研究』一五二頁参照。)
- (13) 松本前掲論文、一三七—一四二頁。
- (14) 『サキヤ派全書』(東洋文庫、一九六八年)第五巻、六一—七七頁。
- (15) Katsumi Mimaki: *Blo gsal grub mtha'*, Kyoto 1982. Cf. 御牧克巳「Blo gsal grub mtha' のことば」『密教学』第十五号、昭和五十三年、九五—一一頁参照。
- (16) 東洋文庫西藏蔵外文蔵 No. 167.
- (17) 東大蔵外目録 Nos. 90—95.
- (18) 東大蔵外目録 Nos. 86—88. (cf. Nos. 82—85)
- (19) Katsumi Mimaki: *Le Grub mtha' rnam bzag rin chen phren ba de dKon mchog 'jigs med dhan po* (1728—1791), Texte tibétain édité, avec une introduction, Zinbun, 14, 1977, pp. 55—112.
- (20) 例えば、チヤンキヤの「宗義書」の場合、有部の教義解説には『俱舍論』を使ひ、それを批評したりする際には *Tarkajyāla*, *Madhyamakavatara* 及びその *Bhāṣya* 等の中観論書に依りてゐる。(Cf. 拙稿「Can skya 宗義書における Vaibhāṣika 的要素について」『日本西蔵学会々報』第25号、昭和五十四年、一—四頁。) また、ロサルの「宗義書」には *Subhagupta* の *Balavyavastā*

- dhikarika* などを用いたこと。(Cf. Mimaki ed., esp. pp. 59—68)
- (21) 東大蔵外目録 No. 227. (東北 No. 6544) Cf. *The Collected works*, Parts 1, 2, (Sata-piṅka Vol. 100) New Delhi 1975, pp. 585—659.
- (22) 因だ、ロハニヤは *Thag chen gyi mngon pa'i sde snod las byung ba'i dlu nwi skor gyi ming gi rnam grangs* (『大乘マニスマルマ蔵所出の中観関係の名目』東大蔵外目録 No. 223 東北目録は No. 6540.
- (23) Text には Mang pos bkur ba (Mahāsammatā) となっているが、一応訂正した。cf. 平川彰『インダ仏教史』上巻、春秋社、一九七四年、一六〇—一六一頁参照。なお、部派分裂に関しては田中教照氏より御教示をいただきました。
- (24) チヤンキヤのインゴ(東洋文庫蔵外 No. 167, 2a 1) とシヤンカラの Mimaki ed. p. 77) には Yul dbus (Magadha) の毘婆沙師を加えて三派とする。
- (25) この部分以外の、例えば五位説などの有部の説については、きわめて機械的な説明の場合が多い。(前掲拙稿参照)
- (26) 例えば二諦説を有部の論書が説く場合、四諦を説くように論ずることが多い。(平川彰「説一切有部の認識論」『北大文学部紀要』2、一九五三年、一四頁、註一参照)

- (27) チャンキヤの「宗義書」には *Bye brag tu bshad pa chen po* (54a2) とある。 *Bye brag bshad mtsho* (62 b2, 3) とは同じである。
- (28) *Chos mngon mdzod kyi tshig le'ur byas pa'i 'grel pa mngon pa'i rgyan zhes bya ba*, 上の論書は、今日のチベットの僧侶が、最も一般的に用いられるものである。チベット切智書 (mChims Nam mkha' grags) は、チベットにおける「集論」の相承を考へる上で重要な人物である。彼については、羽田野伯敏「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一面」『日本文化研究所研究報告』四、昭和四十三年、一三四—一四四頁参照。なお、この論文は、マドマントに關して多々の有益な指摘を含んでいる。
- (29) 東正 (西藏總論) 目錄 No. 5525, *Dam pa'i chos mngon pa'i mdzod kyi rnam par bshad pa thar lam gsal byed ches bya ba*.
- (30) *Ngag dbang blo bzang rgya mtsho*, 東正目錄 No. 56 50. *Chos mngon pa mdzod kyi rnam bshad chos mngon rin chen 'dren pa'i shing rta*.
- (31) *The Collected Works*, Vol. 10, New Delhi 1973. *Dam pa'i chos mngon pa mdzod kyi dgongs 'grel gyi bstan boos thub bstan nor bu'i gter mdzod dus gsun rgyal ba'i bzhed don kun gsal*.
- (32) 『チキヤ派全書』第二卷、二〇八—二五七頁。
- (33) *The Complete works*, Vols. 20, 21. Thimphu BHU-TAN, 1975.
- (34) 拙稿「『大乘百法明門論』チベット訳について」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第十三号、一五頁。
- (35) 拙稿「チベットにおける〈五位〉説——Sa pan 著 *gShun lugs legs par bsad pa* を通して——」『駒沢女子短期大学研究紀要』第十四号、六頁。ただし「七十五巻」という場合の「心(王)」も六巻を指す。
- (36) 羽田野前掲論文、一三八頁。

(ふくだ れんたろう・城西大学講師)